

# ダニエル書 - 第百五十八号

## 幻視の解明：ダニエル書における喪の日々の理解

Jeff Pippenger

2024-03-25

ペルシアの王キュロスの第三年に、その名をベルテシャザルと呼ばれていたダニエルに、一つの事が示された。その事は真実であったが、定められた時は長かった。彼はその事を悟り、幻を理解した。そのころ、私ダニエルは三週間のあいだ喪に服していた。私はうまいパンを食べず、肉もぶどう酒も口にせず、また身に油を塗ることもしなかった。三週間が満ちるまで。

第一の月の二十四日、私は大河ヒデケルのほとりにいた。ダニエル書 10:1-4.

黙示録第十一章の象徴的な三日半のあいだ、二人の証人が通りで死んでいるときに、ベルテシャザルに「ある事柄」が明らかにされる。彼は以前に「幻」(mareh)を理解していた。というのも、第九章でガブリエルがすでに来て、その幻についての理解を彼に与えていたからである。

さて、私が祈りのうちに語っている間に、初めのときの幻で私が見たその人ガブリエルが、急ぎ飛んできて、夕のささげ物の時刻に私に触れた。彼は私に知らせ、私に語って言った。「ダニエルよ、私は今、あなたに知恵と悟りを与えるために出て来た。あなたの願い求めの初めに命令が出され、私はそれをあなたに示すために来た。あなたは非常に愛されているからである。だから、この事を悟り、この幻を心に留めよ。」ダニエル書 9:21-23.

ダニエルが「初めの幻のうちに見た」その「人ガブリエル」とは、第八章においてガブリエルがダニエルのために聖書預言の諸王国の幻を解き明かしたことを指しており、すなわち預言的歴史の幻である「ハーゾーン」に言及しているのである。だが、第九章でダニエルがその意味を悟るべきであった「幻」は、「マレー」、すなわち出現の幻であった。それからガブリエルは、二千三百年の預言の歴史的內訳をダニエルに示すのである。

第九章はダリウスの第一年に成就した。ベルテシャツアルが「キュロスの第三年」に「その幻を悟った」と述べているとき、彼は「mareh」という幻を二年間悟っていた。嘆き悲しむ「その日々」にベルテシャツアルが悟ったのは「事」、すなわちヘブライ語の「dabar」であり、それは長く、定められた時は二千五百二十年であった。

ダニエルはすでに「その事」の一部を理解していた。というのも、彼は第九章でレビ記二十六章の祈りをささげており、それこそが「その事」の祈りだからである。嘆きの二十一日間に、ベルテシャツアルが理解するに至った「七つの時」に関する光は増し加えられ、その嘆きの日々における「七つの時」への光の増加は、1856年における「七つの時」への光の増加を型どっていた。ミラー派も以前から「七つの時」を知っていた。彼らはそれを宣べ伝えていたからである。しかし、彼らが歴史の中でフィラデルフィアの運動からラオデキアの運動へと移行するまさにその時点で、彼らを試みるためのさらなる光が加えられた。

ベルテシャザルの嘆きの日々は、フィラデルフィヤ運動が1856年にラオデキヤ運動へ、さらに1863年にラオデキヤのアドベンチスト教会へと移行した時の預言的歴史と並行している。ベルテシャザルの歴史とミラー派の歴史の双方において、「七つの時」に関する増し加わる光は、第三天使のラオデキヤ運動が十四万四千人のフィラデルフィヤ運動へと移行すること、そして「七つの時」に関する増し加わる光が啓示されることになっていた、待ち時間の間である嘆きの日々と一致している。

ベルテシャツアルは、使者と運動の双方を象徴している。彼の嘆きの日々、使者は「事」（すなわち真理）を理解し、その後、2023年にミカエルが二人の証人を復活させるときに、その「事」を運動に示す。

第一節でダニエルが理解していたとされるヘブライ語“mareh”（キリストの御姿の幻）は、ダニエルの最後の幻の中で四回用いられている。二度は“vision”、二度は“appearance”と訳されている。第一節でダニエルがこの語を最初に用いるとき、彼はその“vision”を理解していたことを示しているが、他の三か所はダニエルがその幻を体験していることを示している。第六節では、キリストの御顔は「稲光の『appearance』のようであった」。

第一の月の二十四日、私が大河、すなわちヒデケルのほとりにいたとき、私は目を上げて見ると、見よ、亜麻布の衣をまとい、腰にウファズの純金の帯を締めたある人がいた。その体はベリルのように、顔は稲妻のよう、目は火のともしびのよう、腕と足は磨かれた青銅のような色で、その語る声は群衆の声のようであった。そして私ダニエルだけがその幻を見た。私と一緒にいた人々はその幻を見なかったが、大いなる震えが彼らに襲いかかり、彼らは身を隠そうとして逃げ去った。こうして私はひとり残され、この大いなる幻を見たが、私のうちには力が残らなかった。私の容色は自分の内で変じて衰え、力を保つことができなかった。ダニエル書 10:4-8。

“vision”と訳される別のヘブライ語があり、それについてはヘブライ語の“mareh”の特徴をいくつか述べた後に取り上げる。前の節々では“appearance”という語が用いられており、それはヘブライ語の“mareh”である。同じ語が16節では“vision”と訳されている。16節では、キリストの幻がダニエルを悲しませた。

そして見よ、人の子のような者がわたしの唇に触れた。そこで、わたしは口を開いて語り、わたしの前に立っている者に言った。「わが主よ、この幻のために、苦痛がわたしを襲い、わたしは力を失いました。」ダニエル書 10:16

「悲しみ」と訳されているヘブライ語の語は、蝶番を意味しており、その節でダニエルが見たキリストの出現の「幻」は、蝶番の役割を果たした。預言における「蝶番」は転換点を表す。

過去の歴史から学ぶべき教訓がある。これらに注意が喚起されるのは、神が今も昔と変わらぬ同じやり方で働いておられることを、すべての人が理解するためである。神の御手は、御業のうちに、また諸国民の間において、今も見て取ることができる。それは、エデンでアダムに福音が最初に宣べ伝えられて以来、ずっと変わらない。

国々の歴史や教会の歴史には、転機となる時期がある。神の摂理により、こうしたさまざまな危機が到来するときには、その時にふさわしい光が与えられる。それを受け入れるなら霊的な前進があり、拒むなら霊的な衰退と難破が後を追う。主はみことばのうちに、福音の積極的な働きが過去にどのように進められてきたか、また将来いかに進められるかを、サタンの諸勢力が最後の驚くべき動きをする最後の闘いに至るまで、明らかにしておられる。Bible Echo, 1895年8月26日。

第十六節は、ベルテシャザルが象徴している歴史における転換点を表している。それは、共和党の角（国家）にとっても、またプロテスタントの角（教会）にとっても転換点である。それは危機を表し、またその歴史のための特別な光が与えられる時点を表している。ダニエルにとっての転換点は、ダニエルが三度のうちの二度目に「触れられた」ときに生じた。ダニエルは三度触れられることになるが、その二度目に触れられたことが、ダニエルにとっての転換点であった。そしてその転換点は、ダニエルが「マレイ」の幻を見た三回のうちの二度目であった。

そして見よ、人の子のような者がわたしの唇に触れた。そこで、わたしは口を開いて語り、わたしの前に立っている者に言った。「わが主よ、この幻のために、苦痛がわたしを襲い、わたしは力を失いました。」ダニエル書 10:16

三度の接触については、まもなく取り上げます。ダニエルが「mareh」という語を用いている四回のうち、最初の一回は彼がその幻を理解したという証言であり、最後の三つの言及は、彼が実際にその現れを見たときの体験を示しています。彼がその現れの幻に言及している三度目は18節で、そこで彼は三度目に触れられます。

そのとき、再び人の姿のような者が来て私に触れ、私を強めた。ダニエル書 10:18

十六節における第二の接触、すなわち「marah」の幻に関する第二の言及において、彼の力は失われるが、第三の接触において、その力は回復される。十節、十六節、十八節において、ダニエルは触れられる。六節において、ダニエルはキリストの現れを見、続いてガブリエルを見る。そして十節において、ガブリエルは初めてダニエルに触れる。

そのとき、私は目を上げて見た。すると見よ、ひとりの人が亜麻布をまとい、その腰にはウパズの純金の帯を締めていた。そのからだは緑柱石のようであり、その顔は稲妻の現れのようにあり、その目は燃えるともしびのようであり、その腕と足は磨かれた青銅の輝きのようであり、その語る声は群衆の声のようであった。この幻を見たのは、私ダニエルひとりであった。私とともにいた人々はその幻を見なかったが、大いなる震えが彼らを襲ったので、彼らは身を隠そうとして逃げ去った。それゆえ、私はひとり残されてこの大いなる幻を見たが、私のうちには何の力も残っていなかった。私の麗しさは衰えて損なわれ、私は少しの力も保てなかった。

しかし私は彼の言葉の声を聞いた。彼の言葉の声を聞いたとき、私はうつ伏せになって深い眠りに陥り、顔を地に伏せていた。すると見よ、一つの手が私に触れ、私をひざと両手のひらで支えるように起こした。そして彼は私に言った。「ダニエルよ、大いに愛されている人よ、私があなたに語る言葉を悟れ。立ち上がってまっすぐに立て。私は今、あなたのもとに遣わされているからである。」彼がこの言葉を私に語ったとき、私は震えながら立ち上がった。すると彼は私に言った。「恐れるな、ダニエルよ。あ

あなたが悟ろうとして心を定め、あなたの神の前にへりくだったその最初の日から、あなたの言葉は聞き入れられていた。私はあなたの言葉のゆえに来たのである。しかし、ペルシアの国の君が二十一日の間、私に立ち向かった。だが見よ、第一の君たちの一人であるミカエルが私を助けに来たので、私はそこにペルシアの王たちとともにとどまっていた。今、私は終わりの日にあなたの民に起こることをあなたに悟らせるために来た。なぜなら、この幻はなお多くの日に関わるものだからである。」ダニエル 10:5-14.

そして第16節では、ダニエルはキリストの幻を見たとき、二度目に触れられる。

彼がこのような言葉を私に語ったとき、私は地に向かって顔を伏せ、口がきけなくなった。すると見よ、人の子らに似た者のひとりが私の唇に触れた。そこで私は口を開いて語り、私の前に立っている者に言った。「ああ、わが主よ、その幻のゆえに私の苦悩は私に臨み、力がまったく残っておりません。どうしてこの私の主のしもべが、この私の主と語る事ができますでしょうか。私はたちまち力を失い、息も残っていないのです。」ダニエル書 10:15-17

そして、キリストではなくガブリエルが現れたときに、ダニエルは三度目に触れられた。

そのとき、人の姿のような者が再び来て私に触れ、私を強め、そして言った。「大いに愛されている者よ、恐れるな。あなたに平安があるように。強くあれ、強くあれ。」彼が私に語り終わると、私は力づけられ、「どうぞ我が主よ、お語りください。あなたが私を強めてくださったからです」と言った。すると彼は言った。「私がなぜあなたのもとに来たのか、わかるか。今、私は帰ってペルシアの君と戦う。私が去って行くとき、見よ、ギリシャの君が来る。だが私は、真理の書に記されていることをあなたに示そう。この事において私と共に立つ者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。」ダニエル書 10:18-21.

ダニエルは三度触れられ、そのうち一度目と三度目は天使ガブリエルによって触れられた。二度目に彼に触れたのはキリストだった。ダニエルは同じヘブライ語の語を四度用いているが、その最初の一度、すなわち一節では、彼は「幻」を理解したと述べている。真理を理解することは重要だが、彼が残りの三度でそうしたように、その真理を経験することとは同じではない。

ダニエルの嘆きの日々が終わったとき、彼はその幻の体験を与えられた。その幻については、嘆きの日々が終わる前から理解を与えられていた。その体験は三段階から成り、三度の接触によって示されている。最初と最後の接触はガブリエルによってなされ、中間の接触はキリストによるものだった。最初と最後の接触は、ヘブライ文字の最初と最後の文字を表していた。その第二の段階で、ダニエルは主に対する反逆の罪人としての自分の状態を認める。ゆえに、中間の接触は反逆を表しており、それはヘブライ文字の十三番目の文字によって象徴されている。

しかしペテロは、もはや舟や積み荷のことなど気にもかけていなかった。これまで彼が目にしたどの奇跡にもまさって、この奇跡は神の力の現れにほかならなかった。イエスこそ、すべての自然を御手のもとに従わせておられる方だと彼は見た。神性の臨在の前で、彼自身の不聖さがあらわになった。主への愛、己の不信への恥、キリスト

のへりくだりへの感謝、そして何よりも、限りない清さの御前に立つ自分の汚れの自覚が、彼を圧倒した。仲間たちが網の獲物を確保しているあいだに、ペテロは救い主の御足もとにひれ伏し、「主よ、私から離れてください。私は罪深い者です」と叫んだ。

それは、神の聖なるご臨在にほかならず、預言者ダニエルが神の御使いの前で死人のように倒れたときの、それと同じ臨在であった。彼はこう言った。「わたしのうちの麗しきは変わって朽ち、力はまったく残らなかった。」同様に、イザヤが主の栄光を見たとき、彼は叫んだ。「わざわざ、わたしは滅びる。わたしは汚れた唇の者で、汚れた唇の民のただ中に住んでいるからだ。わたしの目は王、万軍の主を見たのだから。」ダニエル書 10:8、イザヤ書 6:5。弱さと罪を抱えた人間性が神性の完全さと対比され、彼は自分がいかに欠け、不浄であるかを痛感した。神の偉大さと威光を見ることを許された者はみな、いつもそうであった。

ペテロは叫んだ。「私から離れてください。私は罪深い人間です。」それでも彼はイエスの御足にすがりつき、イエスから離れることはできずと感じていた。救い主は答えられた。「恐れるな。今からは人をとるようになる。」イザヤが神の聖さと自分の値しなさを目の当たりにしてから、彼は神のメッセージを託された。ペテロもまた、自己放棄と神の力への依存へと導かれてから、キリストのための働きへの召しを受けた。The Desire of Ages, 246.

「マレ」とは、キリストの顕現の幻である。しかし、この語をダニエルが用いた第二および第四の箇所においては、御使いガブリエルが示されている。第一の箇所は、ベルテシャザルがその幻を理解したという叙述であるが、最後の三つは、ダニエル自身がその幻を経験したことを示している。ダニエルがその幻を経験する三度において、彼はまた触れられてもいる。

彼がガブリエルに最初に触れられたのは、栄化されたキリストの顕現を見た後であり、その体験によって彼は「顔を地に向け、うつ伏したまま深い眠りに陥った」。その幻は隔たりを生み出していた。というのも、彼と共にいた者たちは「その幻を見なかった。しかし大いなる戦慄が彼らに臨み、身を隠そうとして逃げ去った」からである。最初の失望のとき、エレミヤは「神の御手のゆえに、ただひとり座った」し、ベルテシャツアルには「力は残らなかった」。それは「わたしのうちの麗しきは腐敗に変わり」「力を保つことができなかつた」からである。

ガブリエルが彼に初めて触れると、ガブリエルはダニエルをひざまずかせ、両手のひらを地につかせた。次に、彼は自分の語る言葉を悟って立ち上がるようダニエルに命じ、ダニエルは震えながらも立ち上がった。続いてガブリエルは、ダニエルの嘆きの二十一日の間に何が起こっていたのかを詳しく説明した。彼は、二十一日間ペルシアの王たちと争ったのち、ミカエルが天から降りて戦いに加わり、その後自分がダニエルの祈りに答え、「終わりの日にあなたの民に起こること」をダニエルに説明するために来たのだと明らかにした。ミカエルが天から降りたとき、ガブリエルは終わりの日についてダニエルに説明するために遣わされた。

ガブリエルの説明は、嘆きの二十一日間の終わりにダニエルに与えられた。黙示録十一章を「行に行を」式に適用すると、これは、二人の預言者を墓から起こすために、エゼキエル書三十七章で死んだ骨に二度預言せよと命じられる時を表している。これは、ユダ書においてサタンと関わることを拒みつつ、ミカエルが天から下ってモーセの体をよみがえらせるときに起こる。ガブリエルが嘆きの日々の概略を彼に与えた後も、ダニエルはなおさらに二度、触れられることになる。

ガブリエルが語り終わると、ダニエルは「顔を地に伏せて、口がきけなくなった」。すると、キリスト御自身がダニエルの「くちびるに触れ」られ、その後、ダニエルは「口を開いて語り、わたしの前に立っている者に言った、『わが主よ、この幻によって、わたしの苦悩はわたしの上に臨み、わたしには少しの力も残っておりません。いったい、このわが主のしもべが、どうしてこのわが主と語ることができましょう。わたしには、たちまち力が少しも残らず、息もわたしのうちにとどまってはおりません』。」

キリストを見て言葉を交わしたという経験は、ダニエルを塵にひれ伏させた。彼は口がきけなかったが、キリストが彼の唇に、祭壇の炭でイザヤの唇が触れられたのと同じように触れてくださらなかったなら、そのままであつたらう。

この研究は次の記事において続けることにする。

主の栄光と尊厳のこの啓示をイザヤが仰ぎ見たとき、彼は神の清さと聖さに圧倒された。創造主の比類なき完全さと、自分自身を含め、長らくイスラエルとユダの選民に数えられてきた者たちの罪深い歩みとの、なんと鋭い対照であつたことか！「ああ、わざわざいだ！」と彼は叫んだ。「わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れた唇の者であり、また汚れた唇の民の中に住んでいるからだ。わたしの目が王、万軍の主を見たのだから。」5節。まるで内なる聖所における神の御臨在の満ちた光の中に立っているかのように、彼は、自分の不完全さと無力さのままでは、自らが召された使命をまったく果たすことができないと悟った。だが彼の苦悩を取り除き、その大いなる使命にふさわしくするために、一体のセラフが遣わされた。祭壇から取られた燃える炭が彼の唇に触れられ、「見よ、これがあなたの唇に触れた。あなたの咎は取り去られ、あなたの罪は清められた」と告げられた。やがて神の御声が「わたしは誰を遣わそうか。誰がわれわれのために行くだろうか」と響き、イザヤは「ここにわたしがおります。わたしをお遣わしてください」と応えた。7、8節。

天の訪問者は、待っていた使者に命じた。「行って、この民に告げよ。『聞けども悟らず、見れども認めず。この民の心を鈍くし、その耳を重くし、その目を閉ざせ。彼らがその目で見、その耳で聞き、その心で悟り、立ち返って癒されることのないために。』」9、10節。

預言者の務めは明白であつた。彼は横行する悪に対して抗議の声を上げるべきであつた。しかし、何らかの希望の確証なしにその働きを引き受けることを彼は恐れた。「主よ、いつまでですか」と彼は尋ねた。11節。あなたの選民のうち、だれひとりとして悟り、悔い改め、癒やされる者はいないのですか。

道を踏み誤ったユダのために彼が魂に負った重荷は、むだにはならなかつた。彼の使命がまったく実を結ばないということではなかつた。だが、幾世代にもわたって増し加

わってきた悪は、彼の時代には取り除くことができなかった。彼は生涯を通じて、忍耐強く勇気ある教師であり、滅びを告げると同時に希望を告げる預言者でなければならなかった。やがて神の目的がついに成就するとき、彼の努力と、神の忠実なすべての使者の労苦の、豊かな結実が現れるであろう。残れる者は救われるであろう。このことが実現するために、反逆の民に警告と懇願のメッセージを伝えねばならない、と主は告げられた。「町々は住む者もなく荒れ果て、家々には人がいなくなり、地は全く荒廃し、主が人々を遠くへ移し去り、地のただ中に大いなる離散が起こるに至るまで。」11、12節。

悔い改めようとしめない者たちに降りかかろうとしていた重いさばき—戦争、流刑、圧迫、諸国民の間における力と威信の喪失—これらすべては、そこに怒れる神の御手を認める者たちが悔い改めへと導かれるために起こるはずであった。北王国の十部族はまもなく諸国の間に散らされ、その町々は荒れ果てることになっていた。敵対する国々の滅ぼす軍勢が、幾度となく彼らの地を席卷することになっていた。ついにはエルサレムでさえも陥落し、ユダは捕囚として連れ去られるはずであった。けれども、約束の地が永遠に全く見捨てられたままではなかった。天からの来訪者がイザヤに与えた確言はこうであった。「その中に十分の一が残り、それは戻って来ても、なお食い尽くされる。テレビンの木や櫨の木のように、葉を落としても、その切り株はその内にある。そうして聖なる種がその切り株となる。」13節。

神の目的が最後に成就するというこの確信は、イザヤの心に勇気をもたらした。たとえ地上の権力がユダに敵して軍勢を整えるとしても、何だというのか。たとえ主の使者が反対や抵抗に遭うとしても、何だというのか。イザヤは王、万軍の主を見た。彼はセラフィムの歌「全地はその栄光で満ちている」を聞いた。彼は、背信に陥ったユダへのヤハウエのことばには聖霊の罪を悟らせる力が伴う、という約束を与えられていた。そして預言者は、目前の働きのために奮い立った。3節。彼は、その長く陰しい使命の間じゅう、この幻の記憶を携え続けた。六十年、あるいはそれ以上にわたり、彼は希望の預言者としてユダの子らの前に立ち、教会の将来の勝利についての予言を、いよいよ大胆に語り続けた。預言者と王たち、307-310。